先生の本棚

佐生綾子

1

その日がはたして晴れていたのか……雨だったのか……よく覚えてはいない。でも残り一日の授業日を、その日に変更したのは確かだ。二〇一七年六月二〇日。
歳の差四十歳。片や戦争体験者。片や戦後生まれ。片や英語の先生。片や英語は苦手。そんな二人が、東急大井町線某駅前のパソコン教室で出会った。二人の共通点は、文学が好きなことくらいで……。

先生は、八十五歳までの約半世紀、現役で「グリーン外語専門学校」の創設者・校長だった。東日本大震災があった年に学校を閉じ、九十五歳になった今は、本を読んだりテレビを観たり、旅行をしたり、自由を満喫している。だから先生と知り合ってまず思ったことは、私もなるべく生涯現役でいたい……だった。

パンフレットを見せてもらい、先生がどんな思いで学校を運営していたかが分かった。
《「心と心の繋がりが大切」　烏を白鳥にかえたり、猫を虎にするのが教育ではない。烏は烏なりに、猫は猫なりに、そのよさを認識させ、その特徴を伸ばすのが教育である。烏が白鳥に、猫が虎に、ひたすら憧れる所から人生の悲劇が生まれる。この事に気付かさせ、もっと地についた人生観を築かせるのが、教育ではなかろうか。当校が能力別の少人数制で指導するのも、人間が対象だからであり、個々の能力には違いがあるからである。と同時に、教育には心と心の繋がりが大切だからである。》

学校の名前の由来も書いてあった。
《学校創立以来、皆様からお尋ねの多い本校名・グリーンのいわれについてお話し申し上げます。グリーンという言語には、緑色以外にも、平和、安心、安定、または世界的なムーヴメントとして、自然環境を破壊しないよう他との調和を保ちながら自然を大切に守っていこうという地球環境に優しいエコロジーのイメージもあります。その半面、「若い」あるいは「青い」といった未成熟な印象もありますが、人間でも、社会でも、あらゆる組織に於いて、完成の意識が生じた時、すべての向上心は停滞して進歩が止まってしまいます。このように、何年たっても成長期であり、未完成であるという自覚を持つことが、未来へのポテンシャリティ（可能性・潜在性）につながり、すべての進歩を促す要因であると考えます。いつまでも成長期の端々しく、萌え立つ未来への可能性

を持ち続けることがグリーン外語専門学校の建学の精神であり、本校名にはふさわしいものと思っております。》

私はその学校に通っていた生徒でも職員でもなかったのだけれど、皆が「先生」と呼ぶから、自然と私も「先生」と呼ぶようになった。

「グリーン外語専門学校」は五反田にあった。ビルは今でも残っていて目の前を目黒川が流れている。桜の季節はお花見で沢山の人が訪れる。今年は去年に続きコロナ禍の影響で自粛になってしまったけれど。

「あれが建った頃は他に高いビルは無かったな……隣にあった資生堂のビル以外は」

先生は時々、戦後十五年頃の五反田のことを懐かしそうに話す。私も若い頃、五反田の洋菓子屋さんで働いていた時期があり、戦後間もない五反田の様子を想像してみた。

「あのお菓子屋さん私もよく行きましたよ。その頃会っていたはずですね」

その頃とは三十年くらい前の事で、だから先生と私はいつの間にか三十年前からの知り合い、ということになった。再会したのは三年ほど前、パソコン教室で……。

「今日は『三四郎』を打ちこんでおりました」

先生は『三四郎』の最後のところ「三四郎は何とも答なかった。ただ口の中で迷羊（ストレイシープ）、迷羊（ストレイシープ）、と繰返した。」が好きだと言った。

スーツを着てハットを被ったお洒落な姿。九十歳を過ぎてパソコン教室に通う意欲は凄いと思った。話の中で、私がドナルド・キーン（敬称略）の名前を出すと、意気投合して話が弾んだ。太平洋戦争後、通訳として働いた者として同志のような思いを先生は持っていた。その後日本文学の研究者だと知り、会ってみたい思いが募ったようだ。

私はドナルド・キーンをオリンピック招致反対派として同志のような思いを勝手に持っていた。招致が決定し、大喜びをしているテレビの中の人々を見て、がっかりしている自分のような非国民が他にいるのかと思っていて、見つけたのが読売新聞の記事だった。

《ドナルド・キーン氏「率直に言うと日本人にがっかりしています。力を合わせて東北の人を助けると思っていました。東京は（電気が）明るい。必要のない看板がたくさんある。忘れているんじゃないか。まだやるべきことはいっぱいある」》（２０１３・３・５）

《「伝統忘れた日本に『怒』「学生たちはカントやマルクスを語り、そうした言論の自由をもたらした米国を批判する、岩波書店の「世界」を愛読した。下宿から望めた見事な景観は、新幹線の工事が始まり、ある日、台無しになった。」》（２０１５・１・１５）

リニアモーターカーのこともきっと空の上から反対していると思う。私はとにかく、これ以上人間のエゴで自然を破壊してはいけないという単純な理由で反対している。

沖縄県辺野古のアメリカ軍基地問題もそうだ。将来に負の遺産をこれ以上増やしてはならないと思う。戦争さえなければ……。

二〇一五年六月二十日に下田市民文化会館で行われた、上原美術館開館十五周年記念・ドナルド・キーン講演会『下田と私、そして美術』のリーフレットは私の宝物になった。

《ドナルド・キーンプロフィール　１９２２年、ニューヨーク生まれ。日本文学研究者、文芸評論家。コロンビア大学名誉教授。１８歳の時、英訳『源氏物語』に感動、日本文学研究を志す。コロンビア大学大学院、ケンブリッジ大学を経て、京都大学大学院に留学。帰国後、コロンビア大学で日本文学を教えながら日本を訪れ、川端康成、谷崎潤一郎、安倍公房、三島由紀夫らと交流した。また、三島由紀夫をたずねて、度々下田を訪れた。２００８年に文化勲章を受章。２０１１年の東日本大震災を機に日本国籍を取得。》

プロフィールの上の、笑った写真が愛らしい。

まさか地元の下田で、ドナルド・キーンの講演会を聴講できるとは思わなかった。対談者だった下田市の陶芸家、土屋典康との親交が、下田での講演会を実現させたのだ。有り難かった。土屋氏の東京での個展に先生と出掛けたことがある。同じ早稲田出身者。土屋氏は法学部だったそうだ。

先生は瀬戸内寂聴が好きで、家にも著書が沢山ある。ある日私が『日本の美徳』瀬戸内寂聴　ドナルド・キーン（中公新書ラクレ）を買って先生の家に行った日、先生も同じタイミングで買っていて驚いたことがある。

二〇二〇年二月二十四日のドナルド・キーンの訃報を知ったのも偶然にも先生の家だった。アメリカからのお客様ドイル氏をお迎えしていて、先生は耳がとおいから、通訳のため息子に来てもらっていた。その息子がスマホを見て言ったのだ、

「ドナルド・キーンが亡くなったらしいよ……」

ショックだった。『日本の美徳』の中のドナルド・キーンの遺言を、多くの子供たちに伝えたいと思った。所々を抜粋。

《未来を担う子どもたちへ　……まずは読書、すぐれた日本文学を読もう。お薦めは、やはり古典である。……大人になるには、こうした教養こそが必要なのだ。それと、一つでもいいから外国語を学ぼう。外国を知ることは、自分の国を知ることでもある。……そして、もう一つ旅に出ることだ。多感な時期には特に貴重な体験となる。……パリの次に訪れたウィーンにも忘れられない思い出がある。博物館に血痕が残る軍服が展示されていた。一九一四年、セルビア人の民族主義者が暗殺したオーストリア＝ハンガリー帝国のフェルディナント皇太子の軍服だ。暗殺劇が第一次世界大戦につながったことを本では読んでいたが、血なまぐさいだけで無益な戦争を思い、言葉を失った。私の

平和主義は決定的となり、その衝撃から何十年もウィーンに行けなくなったほどだ。日本人である私が愛する平和憲法が揺らいでいるご時世だ。太平洋戦争末期に原爆が落とされた広島や長崎、激しい地上戦があった沖縄に行くのもいい。遠出しなくても身近なところに、戦争の跡は残っている。戦争の悲惨さは本で学ぶだけではなく、現場で肌で感じることが大切だ。それが生きた学習だと思う。》

ドイル氏は先生よりずっと若いけれど、戦争体験者だった。ベトナム戦争の時徴兵され、近くに落ちた爆弾の破片が今も頭の中に入っていて、時々空港で金属探知機が鳴ることがあると教えてくれた。友人が目の前で亡くなった……壮絶な体験を聞かされた。

「戦争は絶対駄目です！」と英語で言った。

2

地面師事件で有名になった旅館の朽ちた建物が、事件の後も暫く五反田の先生の学校だったビルの近くにあった。今でも学校の近くの床屋に通う先生の付き添いで、何度もその場所を通った。

「あの旅館に行ったことありますか?」

「確か何回か宴席で使ったと思います。五反田にも昔は花柳界があったんですよ。でもその頃、花柳界と言えば柳橋でね、「をぎの」にはよく行きましたよ。女将さんは政治家の犬養健のお妾さんで、その娘に英語を教えました」

その娘とは、安藤和津のことだ。先生の過去の話の中には、時々有名人の名前が嫌味なくすんなりと入っていて、だから余計に興味をそそられる。安藤和津が、お母さんの介護でとても大変だったことは、新聞記事などで知っていた。

「学習院に通っていましたからね。あの時はいろいろありました」

この話を聞いた時私が「『オムツをはいたママ』母との愛と格闘の日々」安藤和津（グラフ社）を取り寄せ、先生の本棚の本が一冊増えた。写真も入っているその本で、懐かしそうにその頃を思い出していた。

《ある日、傘の先でこづきまわされ、私の我慢がついに限界を超え、爆発した。ものすごい勢いで怒り出し、男の子たちみんなに噛みついて引っかいて、傷だらけにしたというのだ。そのときつけられたあだ名は〝シャム猫〟。どうやら苛められてばかりでもなかったらしい。》

先生の「いろいろありました」はこういうことかな……と思った。

犬養健の写真の下に《白樺派の文士でもあった父は、なかなかの男前》と書いてあった。ちなみに先生は、アララギ派らしい。

先生の本棚

「昔、斎藤茂吉に会ったことがあります」
その出会いが単純に凄いと思った。
先生は沖縄で生まれた。お父さんの他界を機に上京したそうだ。
「私がまだ小学校三年生の頃、芝区の桜川町に住んでいて、母親が三田三丁目の家を慶応大出の作家・久保田万太郎に貸していたんです。家賃の回収に苦労していたのを覚えています」
初めて聞いた名前だから、パソコンで調べてみた。
《……東京府立第三中学校（現在の東京都立両国高等学校）に進む一級下に芥川龍之介がいた。（中略）慶應義塾大学予科へ進学したときに森鴎外や永井荷風が文学科の教授に就任した文科改革と出会ったことが運命を決めた。》（ウィキペディア）
先生の机の上の『文学座』から送られていたパンフレットで、
《１９３７年久保田万太郎、岩田豊雄（獅子文六）とともに文学座を創立。》を見つけた。
「三田文学ですよね」
「そうです。三歳年上の兄は芝中から途中で慶應に転校して、そのまま大学まで行きましたからね……私が早稲田でしょ。いつも家で早慶戦をしていました」
「芝居も加藤武が亡くなってからは、観に行かなくなりました」
先生の早稲田大学の同級生には今は亡き、文学座の俳優・加藤武がいて、だから今でも文学座からパンフレットが届く。卒業記念に一緒に翻訳劇をした思い出も話してくれた。
「加藤武が泥棒で、私が神父の役でしたよ」と、モノクロの写真を見せてくれた。
先生の本棚にあった『街のにおい芸のつや』加藤武（新しい芸能研究室）を開いてみた。
《昭和二十年（一九四五年）五月二十五日午後十時頃から二十六日午前一時にかけて、Ｂ２９爆撃機二百数十機が東京上空に飛来。爆弾、焼夷弾を市街残存地区に投下した。強風によって大火流となり、残存東京市街の大部分が焦土と化した。真っ昼間のような明るさの中を、人々は火に追われて逃げまどった。私の住んでいた築地、銀座一帯も例外ではなかった。》
大先輩には森繁久彌がいて、戦後大隈講堂で観た、森繁久彌のショーがとても気持ちを明るくしてくれたと話してくれた。
「あんなに笑ったのは久しぶりだったし、本当に楽しかったな」
ショーには女の人も沢山出てきたそうで、先生の本棚で鎮座している分厚い本『森繁久彌コレクション１自伝』森繁久彌（藤原書店）のこの頃の年表には、

《新宿ムーランルージュに参加し，……ムーラン演技派男優の誕生に喝采が送られる。》と書いてあるから、女の人とはムーランルージュの踊子だろうかと想像した。

「『屋根の上のバイオリン弾き』は何回も観ました」

「残念ながら私は観たことがありません」一度も観ていないことを悔いた。

コレクションは1だけでも六三五ページある。これが5まであるのだから凄いと思った。

先生は1を自由が丘駅前の不二屋書店で予約して購入した。先生の頭には取り寄せるという選択肢は無い。へたに便利の押し売りをすると不機嫌になることを、最近は承知しているからしない。スマホを見ながら歩いている人を見ると

「危ないからやめた方がいいのにな」と文句が出るし、

「平和ボケだな……」は先生の口癖だ。

私は戦争を知らないけれど、スマホを持たないし、平和ボケにも共感できる部分が多いからか、先生と一緒にいることが苦にならない。紙の辞書を引いている先生の姿に安堵する自分がいる。

3

「私は『おしん』が大好きでした。あれ、またみたいな……」

「作者の橋田寿賀子さんは先生と歳は確か同じくらいで、今は熱海に住んでいるはずです」

先生の本棚には『おしんの遺言』橋田寿賀子（小学館）と『安楽死で死なせてください』橋田寿賀子（文藝春秋）がある。表紙をめくると、《安楽死で死なせてください。あくまで本人が希望した場合の話しです。自分の死に方について考えたとき、安楽死が選択肢のひとつとして、ごく自然にあったらいいな、と思うのです。》と書いてあり、考えさせられた。

訃報を知ったのは、先生の家でテレビのニュースを見ていた時だった。ピンと来ていない先生に

「おしんを書いた人ですよ。これ」

私は『おしんの遺言』を本棚から取り出して渡した。

二〇二一年四月六日の東京新聞の一面で「……故人の遺志により葬儀・告別式は行わない。」を読み、コロナ禍だから……とも思ったけれど、生前のインタビューで「義理で出席されるのは嫌だから……」と言っていたのを見て問題提起された気がした。

伊豆新聞のデジタル版を見ると、熱海に住んでいた橋田氏はやっぱり大きく取り上げ

先生の本棚

られていた。下田でも講演をしたことがあると知り、聴けなかったことがとても残念に思えた。

下田に住んでいたのに、熱海の「起雲閣」に行ったのは、東京に来て先生と知り合ってからだ。『尾崎紅葉の部屋』が私にはとても印象的だった。ちょうどその頃の読売新聞の連載小説・平成版『金色夜叉』橋本治。私はそれを読むのが毎日の楽しみだった。その連載が終わって間もない頃、橋本治の訃報を知り、とても悲しかった。下田の家のわたしの本棚には、『大不況には本を読む』が読まれないまま立っているはずだ。

先生の本棚には『金色夜叉』尾崎紅葉（新潮文庫）があった。聞けば昔、尾崎紅葉の生家があった場所のそばに住んでいたこともあるそうだ。

「お父さんは熱海が大好きでしたね……昭和の六、七年頃だったかな、お父さんが海で泳いでいてクラゲに刺されたことがあったな。沖縄から東京に行く時は、いつも熱海に寄りました」

夏目漱石と同じような髭を生やしたお父さんの写真を見せてもらった。

先生の寝室にある、開かずの本棚は、お父さんの形見で百年以上前の物らしい。でもガラス戸が開かなくなってしまい、もう何十年も開けていないそうで、お父さんがどんな本をよんでいたのか、見てみたいと思った。

「上の本が重くて開かないんじゃないですか？」

本棚の上には、『日本の戦争』田原総一郎（小学館）『原節子のすべて』（新潮社）『西行花伝』辻邦生（新潮社）『花の見た夢』五木玲子・太田治子（講談社）『小説の経験』大江健三郎（朝日新聞社）『共生と循環の哲学』梅原猛（小学館）『昭和・遠い日近い人』澤地久枝（文芸春秋）『僕の東京地図』安岡章太郎（世界文化社）などが置いてある。他にも英語のテキストなどの紙媒体が沢山置いてあり、その重さで開かないのだと思った。

すりガラスで中が見えない本棚を、よく見てみると『戦線随筆』小平哲三が読めた。小平哲三は、戦後先生が座間キャンプの日立製作所で通訳の仕事をしていた時の上司で、仲人をしてもらったと聞いていた。無性に読みたいと思った。

本棚の上にあった『室生犀星　金沢と軽井沢』軽井沢高原文庫が発行したブックレットを取り先生は言った。

「室生君とは日大三高のとき、一緒にテニスをしました。若くして亡くなってしまって、残念だな……」

室生君とは室生犀星の息子のことで、私は驚いた。室生犀星は私の好きな作家の一人だ。以前、近いから伊東にある詩碑を見に行き感動した。下田から上京して四年が経つ。

《小説家、詩人として名高い室生犀星（１８８９~１９６２）は伊東には大正末から来遊して、詩や随筆を書き残している。伊東市の野松川沿いの聖母幼稚園前に「じんなら魚」の詩碑が建てられている。大正１２年３月の作。前年失った長男、豹太郎への苦渋に満ちた思いを「じんなら」に重ねたものである。

（碑文）じんなら魚　伊豆伊東の温泉（いでゆ）に／じんならと言へる魚棲みけり。／けむり立つ湯のなかに／己冷たき身を泳がし／あさ日さす水面に出でて遊びけり。／人ありて問はばじんならは悲しと告げなむ。／己れ冷たく温泉（ゆ）はあつく／されど泳がねばならず／けぶり立つ温泉（いでゆ）のなかに棲みけり。》（伊豆文学散歩ＨＰ）

先生は、お子さんがいないと思っていたけれど、生まれてすぐに、亡くしたことがあったと知った。

「室生君は確か大森にすんでいましたが、軽井沢にも住んでいましたね。私も軽井沢に別荘を持っていた時期がありました」

子供の頃、北軽井沢に住んでいた時期が私も確か一年半ほどある。あの頃は特別な記憶がある。自然と共に生きた……。

私が室生犀星を好きになった訳は、『室生犀星金沢と軽井沢』の中の娘・室生朝子が書いた「軽井沢と私」の中にもあった。

《室生犀星は幼年時代をふるさと金沢の犀川のほとりの雨宝院で、養母と共に貧しく育った。愛情のうすい貧しさの多い生活を、自分の子供だけには味わせたくない、という心が、家庭を大切にするという形で、亡くなるまで続いていったのであった。また、目下の人に優しく、偉ばりたい時は自分よりも力のある人に向って、偉ばるのがよい、と犀星は言っていた。これらのつながりとして、犀星はきりぎりす、こおろぎなどの小さい命をもいとおしむ人であった。》

「夏目漱石の確か親戚の人と、田園調布に住んでいる時にテニスをしたことがあるんです。いつも着物の下にテニスウエアを着ていて、テニスが終わるとまた着物を羽織って下駄を履いて帰るんです」

調べてみるとどうやら、夏目漱石の長女筆子の夫・松岡譲のことを言っているようだった。

「松岡譲ですか？」

「そうだ、確かそんな名前だった」

またしても凄い人物が出てきた……と思った。

4

先生の本棚から『自選大岡信詩集』（岩波文庫）を取り出し栞の所を開いて見ると、

《一九五一降誕祭前後—朝鮮戦争の時代
雨にぬれた椅子から垂れ下がる
公園のこちらの隅から煙っている街はずれまで　死
黒塗りの静かな椅子の葬列……
おれたちの青春は雨にうたれている
言えおれたちのために
どのような春が　どのような夢が
荒野の涯に生きながらえて輝いているか
みよ　十円札の皺のような心の皺と
飛び散った肉が焼杭にはりついている
冬の空——おれたちの焦げた空間
（中略）
耳の回路をめぐってくる軍靴の遠鳴り
その低音のどよもしのそよぐ原始の
そのタムタムの……告発せよ
服従し　はや陶酔を夢みはじめる
扁平な耳を
雨にうたれる黒塗りの青春
死を分泌しそれによって肥ってゆくおれたち
腐敗は既に純潔の影の部分
その人知れぬ成熟にほかならぬ
みよ　灰色の曙に
陰湿の地にふるえる影をおとしている茸のむれ
おびただしい流血に
地の塩は　おれたちにはもう
過剰である》

こんな詩が載っていた。

朝鮮戦争の頃先生は、早稲田大学を卒業して社会人になり、通訳の仕事をしていた。

私は自分の「伊豆新聞」への投稿を思い出した。２０１７年のことだ。

《大岡、村田氏訃報に悲しみ　　４月５日、詩人・大岡信氏の訃報を知り悲しみを覚えました。三島市出身で同市には「大岡信ことば館」がありますが、私がその存在を知ったのは2年くらい前で、初めて行った際には、こんなすてきな場所があったことを今ま

で知らなかったのか……と思いました。闘病中とのことを何かで知り心配していました。これから私も詩作をしたいと思っています。全国紙の記事「大岡信は反骨の人でした時代の向かう方向に対しては強い疑惑を抱いていた。高度な情報化で得られる現代の快適さが人間の個別性や独自性をコンピューターの支配する中央管理的な社会に譲り渡すことで得られる〝ささやかな快適さ〟であることを正確に見通していました。四半世紀前のことです」を読み、また一人まともな方が亡くなってしまったと残念でなりません。私がスマートフォンを持てないゆえんであると思わされました。久しぶりに読んだ本紙で「ひとり繁昌記」の著者名に「故・村田稲造」とあるのを見て驚きました。私が伯母の介護で上京しているうちに、亡くなられたことに悲しみを覚えると同時に、まともな方々の遺志を継ぐ重要性を感じています。お二人に「天国から見守っていてください」とお願いしました。》

　投稿をした直後に注文して取り寄せた、『続々　ひとり繁昌記』を久しぶりに自分の本棚から取り出してみた。付箋が貼られたところには、

《時代はアナログ世代から急激にデジタル世代に移った。そこに断層が生じた。コンピューターだけでは世の中は動かない。人が人を動かすのである。》とあった。

5

『大河の一滴』五木寛之（幻冬舎）を先生の本棚で見つけた私は、久し振りに伊豆新聞に投稿した。それが二〇二〇年五月十七日に掲載された。

《五木寛之さんの『大河の一滴』が今見直されているという。私も読みたいと思っていたら、知人宅の本棚でそれを見つけた。帯には「平成人必読の書！」と書かれているが、今なら「令和人必読の書！」だろう。「あとがき」の中の『市場原理と自己責任という幻想に飾られたきょうの世界は、ひと皮むけば人間の草刈り場にすぎない。私たちは最悪の時代を迎えようとしているのだ。資本主義という巨大な恐竜が、いまのたうちまわって断末魔のあがきをはじめようとしている。そのあがきは、ひょっとして二十一世紀中つづくかもしれない。つまり私たちは、そんな地獄に一生を託すことになるのである。』が、コロナウイルス禍の現状下、心に響いた。二十年前に五木さんは、こう思っていたのだ。この本が発行された五年後くらいに下田に移住した。移住して間もない頃、南伊豆での五木寛之さんの講演に行く機会を与えられた。幼い子供二人を連れての聴講は、どうなることかとハラハラしたが、静かにしていてくれたことに感謝したことを、懐かしく思い出した。二人とも今は社会人。仕事がある現状に感謝しつつも、「これからの生き方考えた方がいいよ」と言っている。市場原理主義に異を唱える、少数派

先生の本棚

の一人として。》

それを先生に見せると、「よく書けていますね」と褒めてくれた。それから半月後くらいに、池袋での土屋典康作品展の案内のハガキが届いた。そこには「伊豆新聞読みました。五木さんにも送りました。」と書かれていて驚いた。下田市の陶芸家・土屋典康は五木寛之とも親交がある。

伊豆新聞への投稿は、二十年位前に仙台から下田に移住して間もないころからの、私のライフワークの一部になっていた。その頃からマイノリティな意見を述べていたと思う。例えば二〇一二年三月十八日の投稿。

《「小学校授業に電子黒板不必要」先月、下田市の予算案で「小学校電子黒板購入に１０９０万２千円」の記事を見て、必要のない物に１千万円以上の予算を組むのはどうかと思いました。さっそく調べたところ、全国初のオンブズマン町長のブログを見つけました。「電子黒板を断った理由（略）教室では機械ではなく、先生と生徒の人間の交流が必要である。教室での勉強は基本は教科書である。子供らが勉学に立ち上がるのは先生の息吹であり情熱だ。（略）手取り足取りで先生の熱い息吹が伝わるような授業でないと生徒の頭や心を動かすことはできない。授業では教科書を徹底的に習熟させてほしいのだ」の言葉に共感、感動しました。反対は少数派の意見だろうとは思いますが、保育園児、小学生のお母さんに聞くと「えー、基本は教科書なのに。いらないと思う」と言う意見でした。私の意見は少数派だとは思いますが「真実は、いつも少数派」という湯川秀樹氏の言葉などに励まされます。少数派の意見がもっと聞き入れられていればこんな世の中にはならなかったのにという思いは強くなっていきます。》

そして私の頭に浮かぶのが、歌人・俵万智さんの

「さまざまな師の魅力に導かれ、今の自分がある。教育の原点はやっぱり先生。優れた教材や制度があっても、先生がそれをどう教えるか。何もなくても、生徒の前に素晴らしい先生が一人立っているかどうか。それに尽きると思います」だ。

先生の本棚で、『あなたと読む恋の歌百首』俵万智（朝日新聞者）を見つけた。

「借りていってもいいですか？」

「どうぞ、お持ちください」

その本の挿絵が安野光雅であることが嬉しかった。

私は図工とか家庭科とか、自分の創作意欲かきたてられる授業が好きだった。だからそういう授業がどんどん減らされる、義務教育の行方を憂えている。

安野光雅は先生と同じ歳に生まれている。まだ新しい『いずれの日にか国に帰らん』安野光雅（山川出版社）も先生の本棚にある。

先生の本棚

《昭和も初期は終わり、無謀な戦争に突入しました。だれも、戦争がいけない事のようにおもうものはなかったのでしょう。ほんとうは戦争さえなければ、悲しいこともなかったのです。ここに描いたのは、昭和の初めの頃の、貧しいけれど平和なころを思い出して描いたものです。》

二〇二一年一月一七日の東京新聞で訃報を読み、悲しみを覚えた。

《「最近、気になることがあるの。あなたなら、どう考えるかね」。東京電力福島第一原発の事故に心を痛め、原発に頼らない一昔前の生活に日本は戻れないものかと真剣に考えていた。「不便でも不平不満を感じなかった」。津和野で子どもの頃に見た原風景が胸中に去来していたのだろう。》また一人まともな人の死を残念に思った。

『牧水の恋』俵万智（文藝春秋）は、私が先生の暇つぶしのために購入したものだ。その本の帯には先生の大好きな牧水の歌

「白鳥は哀しからずや空の青海のあおにも染まずただよふ」が書いてある。

「学生の頃、白鳥君という後輩がいましてね、お母さんがいつも寂しそうでした。お父さんは医者でしたが、戦後満洲から帰る途中病気で亡くなったんです。それで白鳥君を、『白鳥は……』の歌で励ましていました」

先生と沼津の「若山牧水記念館」に行った時の写真がリビングの壁に貼ってある。記念館の看板の横に、富士山がきれいに写っていて、この写真を先生はとても気に入っている。

「これは同級生が書いた本です」

と渡された『空腹日記』鈴木積（近代文藝社）は、先生の本棚の一番上にあって気になっていた本。

「お父さんが画家でね、私の友人は公立中学校の英語の先生だったけど、絵も描くんですよ」

そのお父さんとは、洋画家、鈴木千久馬のことだった。帯には

《こんな時代があり、こんな青春があった。　敗戦のころ十八歳になろうとしていた青年が、それからの数年、心と体でもがきながら書きつづっていた記録のそれはまたはしなくも、当時の混乱した世相の断面にも触れる、ささやかだが貴重な資料にもなっている。》

鈴木氏に近著『一寸の虫の大ぶろしき』があると知り取り寄せた。帯に

《なにくそ踏んづけられてたまるか！　人は自分が生まれる「時と場所」を選ぶことは

できない。敗戦後の大混乱期、著者は「なにくそ」という気概を持って生き延びた。気概さえあれば、人間は考えることが出来る。想像することができる。そして「生きる」ことの意味を考え、生活を設計することが出来る。一人一人の人間が生きることの意味を問い直すために広げられた「大ぶろしき」の中に、あなたは何を見つけるだろうか。》

《著者のもとには赤紙は来なかった。しかし、十七歳だった著者は、戦場で自分の肉体が一瞬で消滅する場面を想像して目がくらんだ。命のはかなさ、生きる意味について考えた。敗戦後はそんなことを忘れて動き回っていたが、著者の原点はあの時感じた「無常」にあった。無神論、そして無常は逆の無限なものへのあこがれもそこから生まれた。》

教育に対する思いに共感することが多く、読み終わる頃には付箋だらけになった。

私は、先生に届いていた年賀状の住所に、先生が昔書いた文章を織り込み私が書いたエッセイ『軍備の撤廃は夢物語なのか』を送った。これは二〇一八年に「石橋湛山平和賞」で佳作を受賞した。

後日手紙と共に『悲しみの傷痕』（文芸社）が届いた。戦争の体験記で受賞した作品が載っている。鈴木氏の亡き奥様の作品『張りついたビンタの痛み』も載っていた。

《小学校の教育もおそらく軍隊のそれを見本にしていたに違いありません。先生としては、連帯責任の観念を養うつもりだったかもしれないが、浅はかなことでした。ああいう教育をやっていたのでは、戦争に負けるのは当たり前だと、つくづく思うのですが、いかがでしょうか。そして戦後の教育は、あの無意味な精神主義を裏返して極端な物質主義に変えただけで、地についた反省はなされていないような気がします。》が心に残った。

手紙は、日頃パソコンで文章を書いているが、それが壊れてコロナ禍で修理が遅れ手書きになり返事が遅れたことを詫びることから始まり、かなりの長文だった。

《さて、お送りくださいました『軍備の撤廃は夢物語なのか』は力作で、I先生に関するエピソードなどが盛り込まれていることで、内容のふくらんだものになっていると思いました。人は自分が生まれる時、生まれる場所を選ぶことは出来ないのですが、戦争期につき合わされた者はたまったものではありません。とは申せ私の『空腹日記』はただの記録で、人を感動させるような要素はゼロです。出版によって戦時、戦後の生活を世に知らせようなどの意図はまったく無く、落ち込んでいる自身を鼓舞するために本の形にしただけのものでした。お目にとまったのは望外のことで、大変驚いております。戦時中のことを言うと、『一寸の虫……』を作ったとき、最初の原稿には戦時中の経験をけっこう盛り込んでいたのですが、出版社側は、今どきそんなものを読む人などいないという理由で、没になってしまいました。現実はそんなものです。

……私は先ず軍事大国との同盟を解消すべきだと主張します。それができないで、なんで平和尊重国家と言えるかと、そう思います。将来そのような桟運ができたときには、ためらわず、石橋湛山の小国主義の旗の下に、ということです。》

一枚の絵ハガキが同封してあった。《鈴木千久馬　一九五六年作「てっせん」日本芸術院蔵》と書かれていて、花瓶に生けられたてっせんの花が描かれていた。またの名をクレマチス……私もこの花が大好きなので、思わぬプレゼントに喜びを感じた。

終戦記念日に、巨人ファンの先生はプロ野球巨人対中日戦を観ていた。その試合中に戦争で特攻隊員として戦死した中日の選手・石丸進一が紹介されていた。

「こんなのを見ると、私も若い頃のことを思い出しますね。私も兵隊でしたからね」

7

師との出会いはやはり人生を左右すると、先生の話を聴くとなお更思う。私自身のことを思い返すと、高卒だからだろうか、それほど師の思い出が浮かんでこない。独学の最中の方が、心に残る師に出会っている気がする。例えばこんな投稿を二年ほど前、伊豆新聞にしていた。

《「鈴木先生にお会いして」　ずっと会いたかった鈴木秀子先生にお会いすることができた。秀子先生は、旧県立下田北高校出身の文学博士で60年間、人々の苦悩に耳を傾け、その心により添い続けてきたシスターでもある。下田に住んでいる時に、何回かお話を聴く機会を逃し、残念に思っていたが著書は何冊か読んでいた。今回はある出版社のイベントにゲストとして招かれていたのを知り、チャンスだと思い申し込んだのだ。「感動は人を変える『心に響く小さな五つの物語』」という題名で河合隼雄氏の愛弟子の京都大大学院教授・臨床心理士・皆藤章先生のお話しもとても勉強になった。お話しの中で「『心に響く小さな五つの物語』の『縁を生かす』の物語が心に響かない人はいないのではないか」と話されていたが、それは秀子先生が教えたお話しで、不遇な男の子がある一人の先生との出会いで、人生が好転していくお話。私の心にも響いた。この本の読書感想文コンクールが小学生から高校生まで行われていて、その審査員をしているのが鈴木秀子先生だ。今回の入賞者の子どもたちの感想文の朗読も素晴らしかったが、出版社の社長のあいさつの「人間の心の食べ物は良い本。良い本を食べなければ心が病気になってしまう。本を読む喜び、感動を伝えたい」が心にしみた。最後に私は名刺を持って鈴木先生の所へ行きあいさつした。「息子と娘が下田高校出身で……」というと、「まあ、下田から」と、とても慈愛に満ちたほほ笑みを返していただいた。感想

先生の本棚

文コンクールに応募できる子どもがもういないことを残念に思った。》

その時買い求めた鈴木先生の本に

《禅の研究と著述に九十六年の生涯を傾注された鈴木大拙博士が、こういう言葉を残されている。「人間は偉くならなくとも　一個の正直な人間となって信用できるものになれば、それでけっこうだ。真っ黒になって黙々として一日働き、時期が来れば〝さよなら〟で消えていく。このような人を偉い人と自分はいいたい」》があった。

先生の本棚には鈴木大拙の本が何冊もある。

「鈴木大拙の息子が私の学校で働いていたことがありましてね。副校長として」

そんなエピソードを聴いて、私は興味を持ち調べたくなった。そして『東京ブギウギと鈴木大拙』山田奨治（人文書院）を取り寄せた。先生の学校で、副校長を務めた人が、『東京ブギウギ』を作詞したのだ。

《大拙に影響を与えた西洋の思想家として、スウェーデンボルグ、エマーソン、ソローのほかにも、中世ドイツの神秘主義者マイスター・エックハルト（一二六〇頃—一三二八頃）と、アメリカの哲学者ウィリアム・ジェームズ（一八四二—一九一〇）の名前もあげておかなければならない。大拙が自身の思想を形作り、それを英語で表現するすべを身に付けるときに、彼らからどういった影響を受けたのか、その点についてはまだ研究の余地がある。いまの時点でいえることは、大拙がアメリカに伝えた「禅」の周囲には、東から来た文化の流れと、西から来た文化の流れがぶつかりあう乱流があるということだ。日本の禅がすばらしいので西洋にも受容されたといった、単純なことではないのだ》

私の『森の生活』H・D・ソロー著、飯田実訳（岩波文庫）は付箋だらけだ。

鈴木勝が副校長をしていたのは短期間だったようだけれど、先生の

「お酒が好きな人でね、いつもポケットにお酒を持っていて、トイレで飲んでいたりしましたね」「新聞にコラムを書いていたな……」などの証言を聞くと、鈴木アラン勝の人物像と一致する。

《一九六〇年前後に、アランが何をしていたかの記録は、ほとんどみつからない。ヤシカの仕事には、変わらず関わっていたようだ。歌謡曲の作詞をつづけていた形跡はなく、何で生計を立てていたのかわからない。「東京ブギウギ」や「ボタンとリボン」などの大ヒット曲からの著作権収入は、それなりにあったはずだ。》

を読み、この頃がちょうどグリーン外語専門学校の副校長をしていた時期だと思い。なんだか秘密を知った気分になった。

今回の旅のきっかけは、先生の本棚の『夏目漱石の修善寺』中山高明（静岡新聞社）だった。帯には

《人間と社会、自然の観察者・漱石は、伊豆の修善寺で何を見、据えたか。明治４３年夏、例のカイゼル髭の作家夏目漱石は、……》

とあり、あの髭はカイゼル髭というのか……と思った。

「私がまだ小学校三年生の頃から何年間か、戸田村の東京帝国大学の寮に、サブちゃんに連れて行ってもらいました。達磨山の上から戸田村がよく見降ろせて……」

サブちゃんは、先生のお母さんの弟で東京帝国大学の経済学部で学んだ三郎叔父さん。

「あの頃は新橋から電車に乗って、沼津までは電車で、沼津からは船で行きました。戸田村の人は、さよならのことをバカヤローと言うんです。帰るとき戸田村で船に乗ると、村の人がバカヤローと手を振って送るんです」

私は半信半疑で聞いていた。

「私が泳ぎを覚えたのは戸田村です。農学部の教授が私に泳ぎを教えてくれました。私のことをとても可愛がってくれて」

パソコンで『東京大学戸田寮八十年史』を発見し、二百四十ページから成るそれを全てプリントアウトした。写真も載っていて、昭和十年の写真の中にいる子供が、先生ではないかしら?と凝視した。先生が行っていた頃のことが書かれた寄稿を読んだ。

《小生が東大医学部在学中、戸田寮を訪れたのは昭和十一年の学生最後の夏休みで後にも先にもこれがただの一回であった。（中略）沼津まで汽車で行って、沼津の小さい港からポンポン船に揺られながら戸田湾に着くと、大学のモーターボートが迎えに来てくれて、これに乗り移って寮に着くわけである。寮を離れて帰るときはこれと全く逆のコースをとるわけで、帰路はモーターが岸を離れると、総長であろうと、教授であろうと、或いは学生であろうと、岸から「馬鹿野郎」という親しみの声援に送られて別れを惜しむのが慣しであった。今日では想像もつくまい。》昭和十二年に医学部を卒業した生徒が書いたものだ。

先生が言っていた、「バカヤローと送られる」は嘘ではなかった。

戦前、戦後の戸田寮の様子がうかがえる文章の一つ一つが、とても尊いと思えた。その中に、『草の花』福永武彦の抜粋が載っていて興味を持った。

宿泊は土肥温泉にした。玄関を入り壁にかかった布に書かれた

《はこねじをわがこえくればいずのうみやおきのこじまになみのよるみゆ》を見た先生

は、
「これは万葉集で、源実朝の歌ですよ」と言った。
先生の頭の中には、短歌や俳句が沢山インプットされていて、時々驚かされる。
私は本棚があって嬉しかった。その中の『谷は眠っていた』倉本聰（理論社））『時計』倉本聰（理論社）が気になった。こんな投稿を伊豆新聞にしたことがある。二〇一一年十月九日、東日本大震災直後のテーマは本の紹介。
《現金至上主義憂う倉本聰氏　３・１１の震災以降、以前より哲学書などが売れていると聞き、これからの価値観を何かに求めようとしている人が増えているのだと思いました。私自身も震災以降の価値観を求め、本を読むようになり、以前よりも〝考える人〟になっています。まず震災以降にどのような考えを持っているか知りたくて、倉本聰氏の『獨白（どくはく）２０１１年３月「北の国から」ノーツ』です。倉本氏は３０年前から「都会は無駄であふれ、その無駄で食う人々の数が増え、すべては金で買え、人は己のなすべきことまで他人に金を払いそして依頼する。たわいない知識と情報が横溢（おういつ）し、それらを最も多く知る人間が偉い人間だと評価され、人みなそこへあこがれ向かい、その裏で人類が営々とたくわえて来た生きるための知恵、創る能力は知らず知らずに退化している。それが果たして文明なのだろうか。『北の国から』はここから発想した」と現金至上主義に警鐘を鳴らし続けてきたのです。》

次の日も雨で、タクシーで戸田へ向かった。観光案内所に入ると先生は言った。
「私はね、八十年前くらいにここに来たことがあるんですよ。東大生はまだ来ますか？」
「はい、今も泳いでいますよ」
外を少し散歩したけれど、あまり人影がなかった。対岸に伸びる御浜崎を見て先生は、
「あそこで泳いでいたんですよ」と言った。
「あの頃は楽しかったな……農学部の、のまかいぞう先生が泳ぎを教えてくれました」
思い出せないと言っていた農学部の先生の名前が、すんなりと先生の口からでてきた。景色を見ながら先生は八十年以上前の回想をしている様子だった。
私は先生の本棚から持って来た『草の花』を開いて先生に見せた。
《H村は伊豆西海岸の小さな漁村だ。細長い岬と荒れ果てた断崖とに入口を扼され、漣に浮かんだ油の汚点がひとりでに伸び縮みしながらひろがって行くものうい内海。（中略）
僕はもうここ十年あまりH村を訪れたことはない。が、当時のさびれた漁村は、恐らくは今も、怠惰に、無為に、海岸線のほとりにまどろんでいることだろう。沼津からポ

ンポンと呼ばれる発動機船で通うか、修善寺から五里の山道を達磨越で来るか、交通も不便なら、格別旅人を誘う名所旧蹟があるわけでもない。ただ夏だけは、岬の大学寮が学生たちを集めて、男ばかりの賑やかな水泳場と化す。内海の漣に和船の艪の跡がゆるい波紋をえがき、飛込台から赤い褌が次々とひるがえる。村で唯一軒の菓子屋秋月の店先では、大学生がまずそうに饅頭などを食っている。しかし夏が過ぎてしまえば、蓬髪の漁師の子供たちが、秋風の冷たい防波堤を我物顔に裸足で歩いているばかり。冬ともなれば、村は一層しんとする。……》

　本で自分の知らない時代のことを知ることが出来るのは、本当に尊いことだと思った。

　ある日先生の家で。

「先生は教育者として大切にしていたことは、何ですか？」と聞いた。

　暫く考えてから

「何か発見したときに、それをそのまま真似しないこと」と言った。

「先生の人生にもし戦争がなかったら、どうなっていたでしょうね……」

「想像できないな……」

「でも、戦争はなかったほうが良かったに決まっていますよね！」先生は頷いた。

　先生の家の一室に、大平正芳首相直筆の『良賈深蔵如虚』と書かれた色紙が飾ってある。意味は「すぐれた商人は品物を奥深くしまっておき、一見すると手持ちがないように見える。賢者は学徳をみだりに外に現さないため愚者のように見えるということのたとえ」（デジタル大辞泉の解説）

「『史記』の老子の言葉ですよ。もし私が死んだら、この色紙のことを皆に教えてあげてください」

「大平首相は、一番の読書家として知られていますよね。以前『茜色の空』を読んで、とても感動しました」

　今度、先生の本棚に、『茜色の空』辻井喬（文藝春秋）を持ってこようと思った。

　私は一冊の本をリビングの本棚から取り出した。開いてみると三省堂自由が丘店のレシートが挟まれていた。十年位前に買った本らしい……でも、「出版のご案内」も挟まれたままで、まだ読んでいないようだ。

「先生これまだ読んでないみたいですけど……」

「そうかもしれませんね、これから読みますよ」

「私が先に読ませていただいてもいいですか？」

「どうぞ」

先生の本棚

私は本を後ろから開いた。

《他人と出会い、他人に対してどれだけサービスできるか、ということで、その人の人生は満たされる。パスカルやキルケゴールのような孤独な人間でも、ひとりきりで文章を書きながら、その文章で世の多くの人々に訴えかけようとした。それは、自分の言葉が、不安に悩む人々の心を慰め、生きる希望を与えることになると信じていたからだ。》

を読み、二〇二一年四月一日の東京新聞で読んだ、早稲田大学入学式での村上春樹の言葉を思い出した。

「小説は薬やワクチンにはならないが、ないと社会は健やかに進まない」

私は先生に借りた、『十七歳で考えたこと』三田誠広（河出書房新社）をカバンに入れた。